

▼オピニオン：インフラテクコンを通じた将来の姿（実行委員執筆リレー1） インフラテクコンから広がる世界

シビルNPO 連携プラットフォーム 協働推進部門長
インフラメンテナンス国民会議 市民参画フォーラムリーダー
アイセイ（株）代表取締役
岩佐 宏一



はじめに

新事務局長からこのような命題を受けました。「CNCP 通信のオピニオンは、CNCP の内外、異なる立場から意見が出て、議論を深め、具体性や実現性が高まり、政策提言に近づいていくことを目的にすること」。今までは自己満足な文章で投稿してきた私ですが、着眼点を変えねばと。

さて、そのような命題を受け、今まさに活動を始めた『インフラマネジメントテクノロジーコンテスト（以下インフラテクコン）』について、わたしのこの事業にかける思い、インフラテクコンが目指す姿について語っていきたい。できればインフラテクコンに携わるコアメンバー5名の投稿リレーとして提言に向け記述していきたいと思う。

インフラテクコンの経緯

発端は、（公社）日本ファシリティマネジメント協会 インフラマネジメント研究部会（以下 JFMA 部会）では設立当初からインフラメンテナンス/メンテナンスの必要性から、インフラマネジャー育成、制度構築を目指し、全国にあるインフラ技術者のための教育システムやメンテナンスにおける市民協働等の事例を調査し議論を進めてきた、その中でも昨年（令和元年）9月に発刊した『インフラ点検のすゝめ

現場の目線 -実践編-』では、インフラメンテナンスに携わる技術者が実践技術のノウハウを執筆することで、これから始めようとする若手職員、技術者向けにメンテナンスの奥深さ、面白さを伝えることを目的としたものであり、この若手向け技術者の教本の思想がインフラテクコンの企画に繋がっていく。

インフラテクコンとは、高専生を対象に公共インフラの課題を解決するアイデアをコンテスト形式で競い合うイベントです。

私の頭でぱっと思いつくコンテストは、鳥人間コンテストやロボットコンテスト。テレビの映像からでもそのコンテストにかける思いがビシビシ伝わり、悔しさやうれしさでの涙は非常に好感があり感情移入してしまう。参加する側も応援する側も共に感動ができるコンテストを開催したい！と単純な動機から企画を進めたものである。高専生を対象としたコンテストは、デザコン（デザインコンペティション）、プロコン（プログラミングコンテスト）、すでに32年目を迎え、長澤まさみ初主演で

映画化されたロボコン（ロボットコンテスト）等がある。それらに肩を並べるようにインフラテクコンを進化させたい。

そのような高ぶる気持ちで令和元年12月に企画をはじめ、翌2月のJFMA部会にて計画を発表し賛同を得た。それから約半年の間に実行委員を募り、コンテストの企画をブラッシュアップさせながら、後援の依頼、共催のお願い、高専教員へイベントの告知、ホームページの制作等々、スタートアップならではの生みの苦しみを体験した。そう一番大変だったのは「カネと組織の実態」。そもそもインフラテクコンの実行委員会とは法人格を持たない団体であり、後援を取り付けることも、銀行の口座を作ることもできない。実行委員会として法人を設立するか、受け皿組織を求めるか、何度も議論に載せたが中々歯切れが悪い状況が続いた。そのような経緯を得ながら、当CNCPのプラットフォーム公認事業となり、はじめの一步を踏み出すことができたのである。

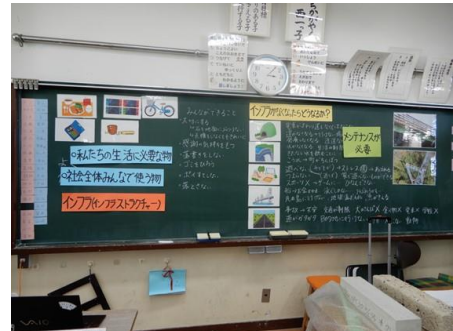


インフラとはについて考える

そもそもインフラって？と聞かれて皆さんはどう答えますか？インフラストラクチャーを直訳すると下部組織、基盤（社会基盤）。これって、社会で繋がる、社会生活、社会経済、社会活動…全ての支えとなるモノ？コト？ですが、これだけではパッとイメージできませんよね。

CNCP 協働推進部門（インフラメンテナンス国民会議 市民参画フォーラム）の活動として、今年の2月に初めて行った『小学校出前授業』（小学5年生の社会科の一貫）でどんな言葉で小学生に話せば伝わるか思索した結果、インフラとはみんなのモノ。自分の自転車でも、筆箱でも、お弁当でもなく、みんなで使う学校であったり、道路、川、公園なんだよと、話し伝えた。

インフラテクコンは、まずインフラとは何？から考えることが重要です。自分のものだったら大切に使うはずなのに、なぜ与えられたみんなのものは大切に使えないのか、使わないのか・・・から考えることが、今後このインフラの課題を考えるきっかけになるのではと思う。



顕在化するインフラの課題

平成24年12月 忘れもしない「笹子トンネル天井版落下事故」老朽化の原因により天井版が落下し9名の方が亡くなった。同時並行して議論されていた社会資本整備審議会 道路分科会から平成26年4月に「道路の老朽化対策の本格実施に関する提言」で最後の警鐘として「今すぐ本格的なメンテナンスに舵を切れ」と、「舵を切らなければ近い将来、橋梁の崩落などの人命や社会システムに関わる致命的な事態を招くであろう」。これらにより公共インフラの老朽化対策として、定期点検が法制化されたことはご承知の通りである。

もちろん老朽化だけが課題ではない。人口減少によりインフラを支える一人当たりの負担率の増加、台風の大型化による被害の拡大、都市部の経済集中から生み出された道路網拡大から発生しうる道路陥没事故、同様に都市部一極集中による地方の過疎化等々、日本国内に限らず世界でも同様な課題が顕在化してきている。

インフラテクコンでは、さまざまな方向から観察し、大いに視界を広げ、アンテナを立てて考えてほしい。

インフラテクコンを通して

インフラテクコンは下記の通り、目指す姿を設定している。

- ・インフラマネジメント/メンテナンスが社会に周知され産業として確立する
- ・インフラマネジメント/メンテナンスをコアに地域共生社会が構築される
- ・インフラマネジメント/メンテナンスが高専のカリキュラムとして扱われる

この産業が広く認知され、社会になくなくてはならない産業になることで、今後社会を担う若手が希望をもって活躍できる産業となる。年代や職能の裾野が広がる仕組みを構築し、技術連鎖で日本から世界へ発信できる産業となる必要がある。

メンテナンスは地味と言われることが多いが、はて本当に地味なのか。

新しいものを構築し子供たちに将来へのつけである税金等足かせを残すのではなく、さまざまな知見を必要とするメンテナンスを確実にを行うことで、古き良きものを後世に残す。

わたくしの子供たちが、今の父さんは忙しくて勉強を教えてくれないし、遊んでもくれない。僕らのために何をしてくれているんだ。私は何を教え伝えることができるのかと考えることが多々ある。正直「蛙の子は蛙」で余程手を掛けなくては蛙の子が凡人を越えることはできない。であれば今の社会が将来を背負う子供たちの負担を少しでも減らす社会に変えることができるならば、それは子供たちに誇れることではないかと思う。

将来を背負う子供たちが安定した基盤で支えられた社会において、インフラマネジメント/メンテナンスの重要性からさらに魅力ある産業に育つことを期待している。

●インフラテクコンのHP：<https://www.infratechcon.com/>